



# 大学病院だより

## 当院における新型コロナウイルス感染症対策について

感染制御部長 波呂 浩孝

中国武漢で発生した新型コロナウイルス(COVID-19)による感染症は、数カ月で中国からアジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、オセアニアに感染が拡大しました。

本邦でも指定感染症となり、令和2年1月31日には当院で患者受け入れ訓練を実施しました。島田眞路学長と武田正之病院長の指導の下、井上 修副感染制御部長、木内博之医療の質・安全管理部長、井上克枝検査部長、森口武史救急部長を中心とし、また、看護部や他の中央診療部門含め病院全体で診療体制を強化すると同時に、患者さんと医療者を感染から守る方策も整え、来るべきCOVID-19との戦いの準備をまいりました。

2月19日にはダイヤモンドプリンセス号のCOVID-19陽性の乗客を当院で初めて受け入れ、その後も県内外の医療機関から転院要請を受けるなどクルーズ船に関連する複数の患者さんを受け入れてきました。

3月6日に県内第1例目を収容しました。3月7日には20代の県民が意識障害を発症し、救急外来に搬送されました。胸部CTで肺炎像があり、森口救急部長がCOVID-19を疑ってPCR検査を行い、COVID-19陽性が確認されました。この症例は新型コロナウイルスによる髄膜炎と診断され、国際感染症学会

発行のInternational Journal of Infectious Diseasesに初発症例として掲載されました。その後も、0歳児が心肺停止状態で当院に搬送され、胸部CTで肺炎像があり、PCR検査でCOVID-19陽性が確認され、ICUにて救急部と小児科医師を中心としたチーム医療が展開されました。現在もCOVID-19患者さんの受け入れを継続しています。

さらに、現在当院では手術を受けられる患者さんに加え、入院予定患者さんも対象に入院前全例PCR検査を行い、院内での水平感染の防止に取り組んでおります。

また、市中感染対策として、いわゆるドライブスルー形式のPCR検査システムを当院で立ち上げ、COVID-19の迅速で正確な検査を提供できるよう準備を進めています。この検査体制は山梨県と、県から委託された山梨県医師会と当院による共同事業で、5月8日からスタートしました。

今後の患者増加を見据え、県内の検査体制を強靱化し、県民の皆様の検査および診療体制に対する不安を払拭できる事業となるよう鋭意努力してまいります。長期戦が予想されますが、今後とも当院の新型コロナウイルス感染症対策をご支援いただければ幸いです。



ドライブスルー PCR 検査シミュレーションの様子



発熱外来専用 仮設待合室

## 先進医療紹介(再発膠芽腫に対するテモゾロミド強化療法)について

脳神経外科

本年度より、脳神経外科において、先進医療：再発膠芽腫に対する「テモゾロミド強化療法」の提供を開始いたします。

膠芽腫は、成人大脳に好発する悪性脳腫瘍で、手術、放射線、化学療法を用いて治療しますが、薬物による標準治療として効果が明らかとなっているものは、アルキル化剤であるテモゾロミドしかないため、この効果をさらに発現させる工夫が期待されております。

そこで、今回、国立がん研究センターを中心とした日本臨床腫瘍研究グループ(Japan Clinical Oncology Group: JCOG)が、再発膠芽腫の患者さん

を対象に、テモゾロミド投与量を増量(用量強化)し、分子標的薬のベパシズマブへの上乗せ効果を検討する多施設共同研究を企画しました。本治療は、今後の保険適応が大いに期待されることから、厚生労働省から先進医療に認定されましたが、この治療の提供には、治験への参加が条件となります。患者さんには、治験内容を十分にご理解いただき、ご参加いただければ幸いです。

最後に、治験準備にご尽力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

## 専門外来のご紹介

### トランジション外来へようこそ 糖尿病・内分泌内科

小児医療の発展により、小児慢性疾患を有する多くの患者さんが成人期を迎えています。しかし、そのような患者さんの多くは成人期以降も小児科に通院していますが、近年、ライフステージに応じた成人期医療への移行が課題となっています。

そこで私達は、小児期に内分泌・代謝疾患を発症した患者さんが、成人期にも適切な医療を継続的に受けていただくために、令和元年10月より、「トランジション(移行)外来」を開設しました。「トランジション」とは、小児科から内科への転科を含む、患者さん自身の成長に合わせた診療の変遷のことです。

小児科、糖尿病・内分泌内科、および外来看護師の定期合同カンファレンスを開催し、トランジションの適性を検討した上で、患者さんに本外来を提案しています。小児科と内科の診療スタイルは異なる点も多く、ストレス無く診療を受けていただくために、一定期間は小児科と内科を交互に受診していただいています。



写真左から、遠藤医師、患者さん、志村看護師

本外来の主体はあくまでも患者さんであり、最終的には患者さん自身に通院する診療科を選んでいただいています。現在、1型糖尿病をはじめ、多くの患者さんが本外来を受診し、内科への転科を終えた患者さんも増えつつあります。

本外来が、小児期から成人期にかけて末永く患者さんに寄り添う医療の一助となれば幸いです。

### 成人先天性心疾患外来を開設しました 第二外科

「成人先天性心疾患」という言葉は、耳慣れない言葉と感じられると思います。成人先天性心疾患外来では、生まれつきの心臓病をもっている成人患者さんの診断、治療、経過観察など、総合的な診療を行っています。

近年の手術、カテーテルおよび薬物治療の向上により、多くの先天性心疾患の子どもが成人となることが可能となりました。我が国では、このような成人先天性心疾患患者さんが、すでに40万人以上いると推定されています。

当院は、これまで県内で唯一先天性心疾患に対する手術ができる施設としての歴史があります。先天性心疾患手術の多くは根治手術ではないため、患者さんの大部分は、手術後も、継続的な長期間の経過観察、診療が必要となります。今までは、小児循環器医あるいは小児心臓外科医が継続して診察する事がほとんどでした。しかし、成人期に到達すると原疾患に加齢に伴う問題が加わり多彩かつ複雑な症状を呈するようになります。また結婚、出産、遺伝など多岐にわたる問題を抱えるようになります。従って、幼少児より診療を担当していた医師だけでは不十分で、成人先天性心疾患を専門とする医師を中心とした新しい診療体制が必要になります。

当院は日本成人先天性心疾患学会会員である循環器内科専門医とこれまで診療を担当していた小児循環器科、小児心臓外科が協力して成人期に達した先天性心疾患患者さんを診療する体制を整え、新たな専門外来として開設いたしました。県内の循環器疾患を有する患者さんを子どもの頃から、大人になるまでシームレスに責任をもって診療できる体制を整えておりますのでご安心ください。

## 医師は常に学んでいます：山梨大学医学部附属 CST センターのご紹介 CST センター長 竹田 扇

みなさん、突然ですが「解剖実習」という言葉を聞かれたことはあるでしょうか。医師養成に少し詳しい方であれば、「お医者さんの卵が、献体を解剖してからだの構造をしらべることかな」という答えをお持ちなのではないか、と思います。つい最近まではそうだったのですが、いまは既に病院で働いている現役医師も「解剖実習」をしなくてはならない時代となりました。それは、医療が進歩し常に高度な技術の習得が必要だからです。専門的

な言葉でこれを「献体（ご遺体）を用いた外科トレーニング（CST）」といい、本学では CST センターを今年4月に設置しました。全国でもまだ数少ない最新の装置を備えた施設で、ここで学んだ医師が大学病院や山梨県内で活躍することになります。実習には献体が必須ですので、皆様の献体制度へのご理解、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

【献体に関するお問い合わせ先】山梨大学医学域総務課 055-273-6724

## 就任あいさつ

### 泌尿器科長

三井 貴彦



令和2年4月1日付けで泌尿器科長を拝命しました。出身は北杜市で、北海道大学を卒業後は、在日アメリカ海軍病院での研修を経て北海道大学泌尿器科学教室に入局し、下部尿路機能、小児泌尿器科、女性泌尿器科、内視鏡外科を主な専門分野として研鑽を積んでまいりました。5年前より山梨大学医学部附属病院で診療を行っています。

泌尿器科では、生命に関わる泌尿器悪性腫瘍に加えて、生活の質に影響を与える排泄に関わる領域を担当していますので、超高齢社会を迎えた本邦において健康長寿を実現する上で重要な診療科です。子どもから高齢者まで幅広く、世界の最先端の医療をお届けできるような診療体制を構築していきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### 遺伝子疾患センター長

石黒 浩毅



令和2年4月1日付けで遺伝子疾患診療センター長を拝命しました。当センターでは遺伝に関する情報に加えて、その情報が親族へ与える影響や倫理的課題などについて、遺伝診療医と臨床心理士がご相談に対応いたします。身体などを診てくれる主治医と交代するのではなく、主治医と連携した診療です。いわゆる遺伝子疾患や染色体疾患のほか、出生前診断や、難聴、知的障害を含む精神疾患、そしてがんなどの遺伝相談もあります。各診療科の先生方と連携し、今後のセンターではさらに「遺伝疾患に併存する神経発達症の長期的支援」と「がんゲノム検査後の支援」にも力を注いでいく所存です。

皆様に求められる医療を提供したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

### 光学医療診療部長

山口 達也



令和2年4月1日付けで光学医療診療部長を拝命しました。光学医療診療部は消化器と呼吸器を対象とした内視鏡を扱う部門です。

私が旧山梨医科大学を卒業した平成8年には光学医療診療部は存在せず、中央検査部門の内視鏡室として診療を行っていました。その後、中央診療部門の一つとして独立し平成14年に光学医療診療部と名称を変更しています。

開設以来、検査件数が増加しており、中でも治療目的の内視鏡の割合が増えています（特にがんに関連した処置）。

内視鏡診療は日本が世界をリードし、目覚ましい進歩を遂げていますが、最新の技術を取り入れつつ、安心して診療を受けられるように努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

### 放射線部診療放射線技師長

相川 良人



令和2年4月1日付けで、佐野技師長の後任として診療放射線技師長を拝命いたしました。

昨年、流行語大賞にもなった「ワンチーム」という言葉があります。すべての人が目標に向かい力を合わせる行動が結果としてラグビー日本チームの大躍進に繋がりました。応援した人々も「ワンチーム」の一員として感動を共にしました。

本年 COVID-19 に山梨大学医学部附属病院も「病院全体がひとつのチーム」として取り組んでおります。放射線部も組織として、個人としてこの精神のもとに難局に挑んでおります。船出としては厳しい状況ですが関係者各位の支えのもと精いっぱい務めさせていただきます。

COVID-19 が制圧された日にきっと「ワンチーム」の一員として感動を共にしたいと希望し就任のご挨拶に代えさせていただきます。

### リハビリテーション部技師長

八木野 孝義



令和2年4月1日付けで小尾技師長の後任としてリハビリテーション部技師長を拝命いたしました。

私は平成11年に旧山梨医科大学医学部附属病院理学療法室へ入職し今年で21年目になります。現在リハビリテーション部は多くの診療科から依頼をいただき、また褥瘡チームや排尿ケアチーム、糖尿病教室での運動指導等様々な場面にも関わっております。これからもリハビリテーションへの需要に応えチーム医療の一助となるよう体制を整えていきます。

今後もリハビリテーション部長 波呂浩孝教授、各診療科の先生方、病棟看護師の方々のご指導ご鞭撻のもと質の高いリハビリテーションを提供できるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### 新生児治療回復室看護師長

田邊 玲子



令和2年4月1日付けで、新生児治療回復室（GCU）看護師長を拝命しました。

私は平成11年4月に旧山梨大学医学部附属病院に入職し、小児科病棟、外来を経験し現在のGCUに勤務しています。GCUでは主に集中治療を脱した新生児の看護を行っています。管理者として経験不足なところもありますがスタッフとともに成長していき、個々が輝けるような職場づくりを目指しています。また、入院される新生児、ご家族の方には、少しでも不安が解消され、希望を持って育児に臨めるような支援ができる病棟づくりを目標にしています。

私自身も3人の母親でありますので、微力ながら育児についてお役に立てればと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

### 手術部看護師長

櫻本 かおり



令和2年4月1日付けで手術部の看護師長を拝命しました。

手術部はロボット支援システムや血管撮影装置・術中MRIが行える部屋を備え、高度な医療を提供しながら、年間6500件以上の手術を行っています。周術期看護を実践する中で、患者さんの背景を捉え個性のある質の高い看護を提供できるよう、スタッフ個々のスキルアップを行っています。また、医師や他部門の方々との連携を図り患者さんの安全を守るチーム医療を目指し看護実践しています。

患者さんが安心して手術を受けられるよう、スタッフ一同協力しながら看護を提供していきたいと考えております。力不足な部分もありますが、スタッフと協働しながら成長していきたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。